

九州天皇家論 章 大八州

九州天(あま)王朝誕生

大倭豊秋津嶋

この嶋は従来は本州に比定されてきた。しかし、本州を島と見る地理認識もごく近世ものである。やはり、「大倭豊秋津嶋」も普通の意味で嶋と考えるべきであろう。だがこの嶋の特定は難しい。判断する材料がほとんどない。古事記では神武がこの嶋の宮に7年居たと書かれているだけである。これだけの史料で特定できるわけではない。でも前に進もう。「筑紫嶋」に次に「伊伎」「津嶋」「佐度」の嶋に国を作ったと云う。「筑紫嶋」には四つの弥生集落があったが、「伊伎」「津嶋」「佐度」にはそのような説明はない。「津嶋」は「津(湊)」を持つ嶋と云う意味を表す。「筑紫嶋」の次に国を作ったと云うのであるから、この嶋は「筑紫嶋」のすぐ隣だと判断しよう。

伊伎嶋・津嶋・佐度嶋



大倭豊秋津島

「秋津嶋」の國は「安藝國」或いは「阿岐國」と呼ばれた。だが「州生み」での島の名前は「秋津島」である。この嶋を特定するには、「秋津」にこだわる。

「淡道島(若松区)」 ➡ 「伊豫二名島(彦島老町)」 ➡ 「隠伎三之子島(下関市伊崎町)」 ➡
「筑紫島(旧門司)」 ➡ 「伊伎島(旧門司区)」 「津島(旧門司区)」 「佐度(旧門司区)」 ➡
「大倭豊秋津島」

この嶋は不思議な名前をしている。

- (1) 「秋津」とは「蜻蛉(トンボ)」の別名である。神武が東征に成功して後、国見をして、激戦地を訪れ、「秋津(トンボ)のように見える国」と云ったが、その國と同じ名前を持つ国である。むろん、神武が国見をして「秋津」と呼んだ国と國生みの「大倭豊秋津島」とは別の國である。しかし、同じ名前を持つということが特定のヒントとなる。この国は「トンボ」と関係する國である。
- (2) 神武は東征の際、「筑紫國」の「岡田宮」に一年滞在していた。そして次に向かったのが「阿岐國」である。この国の「多祁理宮」に七年滞在していた。「筑紫國」とは旧門司区である。次に神武が滞在した「阿岐國」とは「國生み」の「大倭豊秋津嶋」に存在した國である。
- (3) 神武東征説話において「阿岐國・多祁理宮」滞在までは戦闘が記録されていない。理由は「阿岐國」は自国の領土だったからである。先に云っておくと、私たちはすでに神武が国見で「秋津」と名付けた国を特定できている。何故、そのような不思議な名前と呼んだか、その理由も解明できている。「大倭豊秋津島」の特定がここで可能であるのは、「神武東征」解読がすでに終わっているからである。
- (4) 「大倭」とは「大きな倭の国」という意味である。だが、そんなにいうほどの大国ではない。「倭」とはやはり神武記に登場する古代国家の名前である。この嶋の名前の意味は「倭國の豊の秋津嶋」である。
- (5) 「豊」とは「伊豫二名嶋」の女王の名前である。「筑紫嶋」の「豊國」はこの女王「豊」の國である。故に「豊日別」という国名となっている。「大倭豊秋津島」の名前にも「豊」の名前が入っている。この嶋も女王「豊」の國だったということになる。

この島の別名は「天御虚空豊秋津根別」である。別名は「天(あま)王朝」の領土であることを示している。伊邪那岐命の「國生み」によって「天王朝」の支配下に入った。故に「天の御虚空」を付け加えたと考えることができる。しかし、伊邪那岐命の「國生み」以前、すでにこの島は「天王朝」の支配下にあったと考えることもできる。

「根」の意味は「島根」と同じ意味で「島の嶺」である。「別」とはその「分かれ」、分国の意味である。「大倭豊秋津嶋」はどこか。最近まで(2003年)「長府」と考えてきた。「秋」は「広島安芸」と連想させる。だが「長府」には「秋津(蜻蛉)」、トンボと結びつくものがない。「大倭豊秋津嶋」は「広島安芸」ではない。また「高知安芸」でもない。

「大倭豊秋津島」は門司大積

「大倭豊秋津嶋」とはどの嶋か。そのヒントは嶋の名前にあった。嶋の名前の実体は「秋津(トンボ)」である。「秋津」を「安藝」と日本書紀は書いている。日本書紀の「安藝」が本来の名前で、「秋津」が後の世の名前であるかは、判断はつかない。今は意味が分別できる「秋津嶋」から考察していこう。

「秋津」とは「蜻蛉(とんぼ)」である。「國生み」の「大倭豊秋津嶋」は地形が「蜻蛉(とんぼ)」に関係するが故にこの名前と呼ばれた。「トンボ」がどう関係するのか。まさか、「トンボ」が多いたというわけではあるまい。

また「秋津」が表すもう一つの意味は「港」である。港が存在した弥生国家だったのである。むろん奈良ではない。奈良には「津」はない。

「大倭豊秋津嶋」を特定しよう。門司区大積である。大積は「トンボ」という名前を付けるにふさわしい地形である。「トンボ」とは門司大積を流れる川が交尾するトンボのように曲流する姿をいったのである。



門司大積が「大倭豊秋津嶋」である。ここが神武が滞在した「阿岐國」である。神武はこの国の「多祁理宮」に七年居たと古事記は記している。神武が七年も居たのはこの國が重要な國だったからである。伊邪那岐命が建国した古代弥生国家の中で、何故、この國が神武にとってそれほど重要な國だったのか。この滞在がその後の神武の人生を決めることになった。何故、それほどの意味をもつ國だったのか。

大積 門司区 [2009/06/20]



壇ノ浦で平家が滅亡後、鎌倉時代に入ると、東国より下総親房(しもふさちかふさ)が門司関に下向して来ました。下総氏はのち門司氏と称しました。門司氏の所領は門司六郷で、片野(現在の小倉北区三萩野付近)・柳(現在の門司区大里付近)・楠原(現在の門司港付近)・吉志・伊川・大積郷でした。その六郷に一族を分立させていきました。

A photograph of the main hall (Honden) of the Katsuragi Shrine. The building is a traditional Japanese structure with a dark tiled roof and wooden walls. It is situated in a courtyard flanked by two large, ornate stone lanterns (Toro). The area is surrounded by lush green trees, creating a serene and natural atmosphere. The ground in the foreground is covered with fallen leaves and gravel.

大積神楽は11月3日の天疫神社の秋の祭礼に奉納されます。神職達が組織した神楽座によって、江戸時代末には盛んに行われていたようですが廃絶されました。現在の神楽は、明治になって氏子達によって復活されました。神楽本来の33番の演目のうち、舞神楽3番・面神楽4番の7番が伝えられています。



新門司への新しい道路に戻ります。先の方にトンネルが見えます。トンネルの先は喜多久です。左手にちづる園という案内板が出ていて、そちらに進めば海岸に出ます。

大積の海岸は大きく湾入していて、東側が周防灘に開いています。昔は船が出入りしたかもしれませんが、現在はその入江は砂州が発達しています。海岸の左手に、奥畑川は山中川と合流して流れ込みます。右端の白い建物が身障者施設のちづる園です



ちづる園の先から北から北東の眺めです。対岸は白野江で、その先の霞んで見える山々は、本州山口県の山並です。海は周防灘です。先方に小さく見える船は、開門海峡に出入りしている船舶です。

白野江には白野江植物公園があります。県道黒川・白野江・東本町線を先に行くと、左の白野江植物公園の前を通る道と、海岸の方に行く道に分かれます。

(以上全て HP「北九州のあれこれ」より)

綾羅木郷遺跡

下関市には弥生時代の大きな集落遺跡が発見されている。「國生み」の弥生国家もこの遺跡と同じような弥生集落だった。「國生み」は「天(あま)王朝」の国家建設譚であるが、この国家以外にも多くの弥生国家が存在していた。遺跡が物語る。下関市綾羅木もその一つである。



下関市綾羅木は本州最西端響灘に面する地域であり、この地域は、北九州地帯とともに弥生時代の中心地域で、国指定遺跡である梶栗浜遺跡・土井ヶ浜遺跡などとともに学術上重要な遺跡がある。

綾羅木郷遺跡はこれらの遺跡群の中心をなすもので、平野の中心に広がる丘陵の全面が 弥生時代の遺跡である。発掘調査により、台地東部の地域には竪穴住居跡や埋葬遺構が発見され、台地の中央部から西側は弥生時代前期に特徴的にみられる多数の袋状竪穴群や弥生時代中・後期の溝などが発見されている。古墳時代(ほぼ3世紀末から7世紀)の住所跡も存在する。台地の西北の端には箱式石棺を主体とする、前方部が低く平らな前方後円墳もある。

遺物として、弥生時代前期前半の土器や多くの石器などが発見されている。

(bunkazai.ysn21.jp/general/summary/genmain.asp?mid=10029&cdrom=)

